中世の漢語「高名」（「功名」）について

李　妙熙

キーワード　高名　功名　中世の漢語

要旨　漢語が日本語の中に定着する際、漢籍とは多少異なる意味に転じる場合があるが、その傾向を見るために、中世の和漢混淆文などによく用いられている「高名」について、「功名」と関連して考察して見た。

その結果、「高名」のもとの意味は「有名」であるが、鎌倉初期に、「手柄（をたてる）」という意が生じて、中世全期を通じて用いられ、この意の「高名」が後の室町期に「功名」と混同されるようになり、江戸時代にも続くのであった。しかし、明治以降は、「高名」はもとの意である「有名」の意に用いられており、「手柄」の方は、「功名」が用いられていることが観察できた。

一、はじめに

中世の語彙の特色の一つとしては、漢語の増大が注目される。中世になると、和漢混淆文の成立を見、漢語が増大し、多くの漢語が日本語の中に浸透し定着して行くのである。この定着の際、中には漢籍の中で用いられた意味とは多少異なる意味に転じる場合も起こる。

そこで、本稿では、このような傾向の一端をうかがうために、和漢混淆文の典型といわれている『平家物語』『太平記』の中で用例がやや多く見られる「高名」という語について検討していきたいと思う。

たとえば、

①「いかに佐々木殿、高名（かうみやう）せうどて不覚し給ふな。水の底には大綱あるらん」といひければ、（平家物語・下・巻九・170ペ）

②赤坂ノ大将金澤イヨノ守大佛ノ奥州ニ向ツて宣ケルハ前日赤坂ノ城ヲセメ落し候つる事全ク士卒ノ高名ニアラス（太平記・巻七・47ペ上）

のような例が見られるが、ここに「高名」というのは、「手柄（をたてる）」という意味で、「功名」と同じ意味のように用いられている。

ところが、平安時代には「高名」は、次のように「有名」の意味として使われていた。たとえば『枕草子』に、

③「これやこの高名（からこみやう）のゑぬたき、などさも見えぬ」といひける、（一〇三段・158ページ）

という話があるが、ここの「高名」の例は、「これこそはあの有名なえぬたきさん」と解せるものであって、「有名」という意である。この「有名」という意が転じて、『平家物語』『太平記』のように「手柄（をたてる）」の意味になり、この意の「高名」が後に「功名」と混同されるに至るのである。

以下、「高名」について「功名」と関連させて、意味と読みの面に分けて考察してみることにする。

二、意味について

まず、「高名」と「功名」の二語の意味について、中国の例から見ることにする。漢籍の例は『大漢和辞典』を典拠として、その記述を見ると、

【高名】㊀高い名譽。又、盛名。

〔韓非子、十過〕而滅二高名一、爲二天下笑一者、何也、不レ用二管仲一之過也。

〔漢書、兩龔傳〕楚王入レ朝聞二舍高名一、聘レ舍爲二常侍一。

〔後漢書、逸民、嚴光傳〕少有二高名一、與二光武一同遊學。

㊁kao[1] ming[2]　㊀名高い。㊁御高名。

【功名】㊀てからとほまれ。又、てからによる名譽。

〔荀子、王制〕欲レ立二功名一、則莫レ若二尚レ賢使レ能矣。

〔莊子、刻意〕若夫不レ刻レ意而高、無二仁義一而修、無二功名一而治。

〔魏徵、述懐詩〕人生感二意氣一、功名誰復論。

とあって、漢籍においては、「高名」と「功名」はもともと別の語のようである。

次は、日本における例を見ていくことにする。

まず、『日本国語大辞典』の記述を見ると、

こうみょう【高名】

㊀（形動）高貴な名前。

㊁（形動）名声が高いこと。有名なこと。また、その名。こうめい。

㊂（―する）てがらをたてること。武功をたてること。また、そのてがら。功名。

こうみょう【功名】（名）てがらをたて名をあげること。こうめい。

とあって、「高名」の㊂と「功名」とがほとんど同じ意になっている。

次は、資料(注1)における「高名」と「功名」の意味を検討していきたい。

(1) 上代・中古

まず、「高名」の例から検討してみる。「高名」の用例は古く『万葉集』から見られる。

④辭二皇族之高名一、賜二外家之橘姓一已訖。（万葉集・巻六・一〇〇九）

ここにおいての「高名」は、「高貴な名前」という意味として用いられている。

平安時代には、和文において、次のような例が見られる（『今昔物語』では全三例見られるが、三例とも、和文脈が強いという巻二十三、二十五、二十九の中にある）。

⑤供なる物ども、「かうみやうの栗駒山にはあらずや。馬をこそ賜はせたなれ」など言ひて、（狭衣物語・上・265ページ）

⑥暇もえ申し出づまじきなめりと思ひつるに、高名の大宅世次とぞいひ侍りしかしな。（大鏡・巻一・36ページ）

⑦主は、その御時の母后の宮の御方のめしつかひ、高名（カウーヤウ）

⑧兼時ハ宮城ト云高名（カウーヤウ）ノ上リ馬ニゾ乗タリケル。（今昔物語・巻二十三・26話）

⑤の例は「有名な栗駒山」、⑥は「評判の名馬」、⑦は「名高い大宅世継」、⑧は「有名な駿馬」の意であって、先に述べた③の『枕草子』の用例と同じ意味として用いられている。

また、『日本霊異記』に次のような用例が見られる。

⑨福貴熾之時高名雖レ振二華裔一　而妖交窘之日无所婦唯一旦滅也　（日本霊異記・中・174ページ）

これは、「有名」の意であって、和文と同じ意として用いられている。

以上、上代から平安、院政期までの「高名」を観察して見たが、もとの意である「有名」という意として使われていることがわかる。

一方、「功名」は「手柄とそれに伴う名声」の意を示す語であるが、例をあげると、

⑩功名未立年未老　毎願名高年又耆　（菅家文草・巻二・有所思・186ページ）

がある。『菅家文草』は平安前期の漢詩文集であって、唐の詩、特に白楽天の影響が多かったであろうと思われる。この例は、先の漢籍の例、すなわち、『唐詩選』の詩、魏徵の「述懐」に、

人生感二意氣一、功名誰復論

の「功名」と同じように「手柄による名声」の意を示している。

以上の用例から考えると、「高名」は「有名」の意、「功名」は「手柄とそれに伴う名声」の意として使われており、中古までは、二語は別々の意味として使われていることがわかる。

(2) 中　世

中世になると、「高名」の用例は多くなるが、特に和漢混淆文の類に多く現われる。

⑪御方の勢をうしろにおいてかけたればこそ、高名不覚も人にしらるれ。（平家物語・下・巻九・202ページ）

⑫かゝる晴の軍しおふせて後代に名をあげんずる家忠ぞ。但高名したればとていそぎは出まじ。（保元物語・中・114ページ）

⑬是を御分にたてまつる。高名し給へ」とて、ひかれけり。（曽我物語・巻八・305ページ）

⑭父の屍に血をあへし給ふなよ。高名して、四国西国の果に在すとも、（義経記・巻五・210ページ）

これらの軍記物語の例は、「手柄（をたてる）」を意味している。

用例から推定してみると、「高名」に「手柄」、その中でも戦功・武功などの意が生じたのは鎌倉初期であろうと思われる。また、⑫、⑬、⑭の例は、「高名す」の形として、「手柄をたてる」の意であるが、このような形も鎌倉初期から見える。

中世には軍記物語のみではなく、説話類、擬古文、そして記録体の文章にも「高名」の例が見られる。

⑮西面、北面の者ども、めん〳〵に、「これを見あらはして、高名せん」と、心にかけて、（宇治拾遺物語・一五九・357ページ）

⑯高名の木のぼりといひしをのこ、（徒然草・一〇九段・178ページ）

⑰貫之が家に、枇杷の大臣、魚袋の歌の返し、とぶらひにおはしたりしをも、道の高名とこそ、（増鏡・

第一・261ペ）

⑱一人當千ノ顯高名ヲ。其ノ勸賞件ノ熊谷ノ郷ノ之地ニ頭職成シ畢ンス。（吾妻鑑・33ウ7）

⑲万人勵力打消了。併御勇氣之御高名也云々。（看聞御記上・応永二十三年七月一日・27ペ）

⑳南來萬里到中國。久聞高名未相識。（若木集・和遠藏主寄韻・1103ペ）

これらの用例を見ると、説話類（⑮）、記録文のような和化漢文（⑱⑲）の中においては、「高名」は「手柄（をたてる）」の意を示している。しかし、中古の和文を承け継ぐ擬古文（⑯⑰）においては、「有名」という中古に見られる意味と、「手柄（をたてる）」という新しい意味との、両方の意味が見られる。また、漢詩文である五山文学（⑳）の中では、もとの意である「有名」の意として用いられている。

このように、中世には「高名」は「有名」という意から「手柄」の意に転じて、特に、和漢混淆文の中で多く使われており、室町後半には、口語を多く含む口語資料の中にも見られる。

まず、室町後半のキリシタン資料の例から見ることにするが、『天草版平家物語』以外には用例が見られなく、『天草版平家物語』の用例は、和漢混淆文である『平家物語』に引かれて使われているようである。

㉑大太刀に強弓をもって一方の大将にさしむけられたに、度度の高名肩を並ぶる者もなかった。（天草版平家・4・243ペ）

また、抄物の用例も取りあげられる。

㉒引車――トハ諸將ト先ヲ争テ合戦ヲセヌソ諸將ノ進ム時ハワキヘノイテ諸將ニ高名ヲサスルソ（蒙求抄・五36オ）

㉓今時ソツト軍ニ合テチトノ浓ナンドヲ被テ高名ダテヲシテ恩賞ヲムサボリ功ヲ立ルヲ悪テ（論語抄・23ウ⑦）

これらの例はいずれも、「手柄（をたてる）」の意を示している。

室町時代末の『日葡辞書』の記述を見ると、

Cõmiõ. カウミヤウ（高名） Tacai na.（高い名）戦争の際に立てた或る手柄によって得たよい評判や名声。II Cõmiõuo suru.（高名をする）戦争で勇敢な働きをする。（『邦訳日葡辞書』）

と記されているが、中世全体を通じて、「高名」の意は、「戦功や武功（を立てる）」を示す場合が多い。また、「鎌

倉・室町時代には有名という意味で『名誉』を用いることが多い[注2]」という指摘もあるが、このような事実は、中世に「高名」の意が「有名」から「手柄」に転じたことと関係があるのではないかと思われる。

次は「功名」の用例を見ていこう。

「功名」は鎌倉期にはほとんど見当らないようであり、漢詩文である五山文学と室町後半の抄物においてその例が見られる。

㉔諲書記蘊英邁奇傑之才略。初無意功名之塗。（鈍鉄集・送諲書記住福昌序・386ぺ）

㉕故隠――面白クニヨウシテ功名ヲナイタソ白公モ自立シテ王トナラスワ其功モイカイモノテアラウソ（史記抄・一〇42ウ）

五山文学では、前の⑳の例は有名の意であって、「高名」と「功名」は別の語として用いられている。しかし、抄物においては二語はほとんど同じ意味として使われているようであるが、抄物は漢籍および仏典の注釈書であって、漢文のところもあり、和文のところもあるので、両方からの影響をうけて、二語の意味が混同されて使われているようである。

このような現象は、『謡曲集』の用例からもうかがうことができる。

㉖たれか白真弓取りの身の、最期に臨んで、功名（こおめい）を惜しまぬ者やある。（謡曲集下・巴・317ぺ）

㉗礪波山や倶利伽羅、志保の合戦においても、分取り高名（こおみよお）のその数、たれに面を並べ、（謡曲集下・巴・317ぺ）

以上のように、鎌倉初期に「高名」の意が転じて、「手柄（をたてる）」という意味になり、中世全期を通じて「高名」は「手柄」の意として使われていたが、室町後半の抄物では「功名」も使われており、「高名」と「功名」の二語はほとんど同じ意味として用いられて混同されるに至ったのである。

(3) 近世以後

江戸時代に入っても「高名」は「手柄」の意として用いられる。

㉘此刀は、先祖信玄公にめしつかはれ、信州川中嶋の一戦に、高名（からみやう）いたせし事申伝へて有、（西鶴・男色大鑑・二・225番）

㉙手がら高名（からみやう）やすみめされ、ふたりの衆にも酒おませ、おめでたいおかしらさま、（近松・博多小女郎波枕・151番）

これらは「手柄」の意としてとれる例であるが、「高名」の用例は中世より少なくなる。

また、「功名」の例も、室町後半に続いて見られる。

㉚かちはらとじゆ[マヽ]んあみたふか二度のかけそれはかうみやうこれはみやうかう（きのふはけふの物語・下34・45ペ）

㉛偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。（おくのほそ道・平泉・84ペ）

右の例は、「手柄をたて、名をあげる」の意であって、江戸時代にも、「高名」と「功名」はほとんど同じ意として用いられている。『きのふはけふの物語』の例は、『平家物語』に見える「二度の懸」の話をふまえた狂歌であるが、中世なら「高名」が用いられるべきである。このことからも、江戸時代に、二語が混同されて使われていることがわかるのである。

一方、明治以降になると、用例から見ると、「高名」はもとの意である「有名」の意にしか使われていないようであり、「手柄」の意としては「功名」が使われているのである。

㉜なにしろ、鴨の長明さまと言えば、京に於いても屈指の高名の歌人で、（太宰治・右大臣実朝・327番）

㉝余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、（森鷗外・舞姫・18番）

この事実は、明治時代の辞書の記述とも一致する。

○かうみやう[コヨ]（高名）。名高キ「――」。

こうみやう（功名）。功ヲ立テ、名ヲ揚グル「――」。

（『稿本日本辞書言海』、大槻文彦著）

○かうみやう（高名）名ノタカク現レルコト。

こうみやう（功名）手柄。＝手柄ト、評判ト。（『日本大辞書』、山田美妙編）

三、読みについて

次は、「高名」と「功名」の読みについて検討してみる。

『大漢和辞典』によると、「高名」はカウメイ、「功名」はコウメイ・コウミヤウとある。「名」は呉音「ミヤウ」、漢音「ベイ」、慣用音「メイ」である。

「高名」は中世までの文献をみると、ほとんど「カウミヤウ」と読んでいる。ただし、『平家物語』で「カウメイ」と読んだ例が一例見られる。

㉞「信濃に有し木曽路河」とうたはれけるぞ、時にとって（ッ）ての高名[からめい]なる。（平家物語・上・巻六・427ペ）

室町後半のローマ字表記のキリシタン資料、たとえば、『天草版平家物語』では「高名」が一〇例見られるが、いずれも「cõmiõ」とあって、開音になっている。

また、『邦訳日葡辞書』でも、

Cõmiõ　カウミャウ（高名）

とあって、同様に開音と記されている。

室町時代の他の辞書類にも、

高名（カウミャウ）（メイ）（『文明本節用集』）

高名（カウミャウ）（『印度本・明応本・天正本・饅頭屋本・黒本本・易林本節用集・伊京集・運歩色葉集』）

とあって、「カウミヤウ」と記されている。

また、江戸時代の辞書も同様に「カウミヤウ」である。

高名（カウミヤウ）（『書言字考節用集』）

以上のことを見ると、「高名」の読み方は「カウミヤウ」が一般的のようである。

一方、「功名」の場合は、作品における表記はほとんど漢字表記であるので読み方は明らかではない。『謡曲集』『きのふはけふの物語』に仮名表記が見られるだけである。

㉟功名（こおめい）を惜しまぬ…（謡曲集・㉖と同例）

㊱二度のかけそれはかうみやうこれはみやうかう（きのふはけふの物語・㉚と同例）

㊱の例は仮名書きであって、「功名」か「高名」か、確実ではないが、日本古典文学大系本では「功名」をあてている。後で「功名」の「功」の開合について触れようとするが、合音として扱っているから、こうして見ると、この例は開合の誤りと見られる。

また、室町時代の辞書『文明本節用集』には、「功名」が「コウメイ」と記されている。

江戸時代にも、『書言字考節用集』には、「功名」を「コウメイ」と読んでおり、『音曲玉渕集』は、いわゆる開合の別を説いているが、「功名」の「功」を合音「コウ」としている。（注3）このようなことから、佐藤喜代治氏も指摘している通り、（注4）元禄のころは、「コウメイ」の発音が正しい読み方のようである。

以上、「高名」と「功名」の読みについて観察してみたが、「高名」の場合は、文献と辞書においてほとんど「カウミヤウ」と読んでいることがわかった。

「功名」の場合は、確実な用例がないから明らかではないが、『文明本節用集』『書言字考節用集』『音曲玉渕集』の記述によって「コウメイ」が一般的であったので

あろうと思われる。

以上の「高名」と「功名」の意味と読みを表にまとめてみると次のようである。（表は次頁参照）

四、おわりに

以上、中世の和漢混淆文などによく使われている語の一つである「高名」について「功名」と関連して考察してみた。

「高名」は「有名」という意が原義であって、中古まではその意味として使われていたが、鎌倉初期の和漢混淆文の類では意味が転じて、「手柄（をたてる）」の意が生じて使われるようになり、「功名」とほとんど同じ意味になったのである。この意の「高名」が後、室町期あたりから「功名」と混同されて江戸時代にも続くのである。明治以降は、「高名」はもとの意である「有名」の意に用いられており、「手柄」の方は、「功名」が用いられていて、古代語（中古）の意味にもどるが、ここで「高名」という語の中世的な様相が見られるのである。すなわち、中世の軍記物語は、合戦の叙述が多いが、「高名」という語も原義「有名」から、そのもととなった「戦功」や「武功」を意味するように転じたのではないかと思われる。

中世においては、漢語が実用化することの中で、漢籍の中で用いられた場合と多少異なる意味に転じることもあるが、「高名」という語を通して、このような傾向の一端をうかがうことができた。

ある傾向を見るためには、もっと多くの資料による多くの語についてのくわしい検討が必要であろうし、今後の課題として考えてみたいと思う。

全用例	読み				意味			分類
高名（功名）	その他	漢字書き	カウメイ	*1) カウミヤウ	手柄（による名声）	有名	（高貴な）名前	作品
1		1					1	万葉集
2		2				2		日本霊異記
(1)		(1)			(1)			管家文草
1	高名（かう）1					1		枕草子
1				1		1		更級日記
1		1				1		狭衣日記
5	高名（ミヤウ）1	4				5		大鏡
3				3		3		今昔物語
2		1		1	2			宇治拾遺物語
16			1	15	16			平家物語
1				1	1			保元物語
2				2	2			平治物語
1		1			1			十訓抄
1		1			1			吾妻鑑
4		4			2	2		徒然草
11	高名（こう）1			10	11			曽我物語
13		13			13			太平記
2		2			1	1		増鏡
5		1		4	5			義経記
10				10*2)	10			天草版平家物語
2 (1)		2 (1)			2 (1)			蒙求抄
2		2			2			論語抄
3 (4)		3 (4)			3 (4)			史記抄
2 (14)		2 (14)			2 (14)			中華若木詩抄
1 (1)		(1)		1	1 (1)			四河入海
1				1	1			御伽草子
(1)				(1)	(1)			きのふはけふ
3	高名（こうみやう）1			2	3			西鶴
(2)		(2)			(2)			おくのほそ道
1				1	1			近松
(1)		(1)			(1)			森鷗外
(3)		(3)			(3)			夏目漱石
2		2				2		太宰治

*1) 仮名書きと漢字に振仮名をつけたものを含む。

2) cŏmiŏ.

3) 『太平記』は巻二十までの調査である。

4) （　）は「功名」の用例数である。

注

（1）使用したテキストは次の通りである。

『狭衣物語上・下』（『日本古典全書』・松村博司外校註・朝日新聞社・昭40年）、『十訓抄本文と索引』（泉基博編・笠間索引叢刊78・昭57年）、『寛永三年版吾妻鑑巻第二漢字索引』（峰岸明編・笠間索引叢刊70－2・昭54年）、『鈍鉄集』（『校訂五山文學全集第一輯』・上村観光編・裳華房・明39年）、『若木集』（『校訂五山文学全集第二輯』・上村観光編・裳華房・明39年）、『神田本太平記』（國書刊行會・明40年）、『看聞御記』（『續群書類從補遺二』・〈原〉塙保己一〈補〉太田藤四郎編・続群書類従完成会・昭33年訂正三版）、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著・明治書院・昭61年）、『蒙求抄』（『抄物資料集成』・岡見正雄外編・清文堂・昭46年）、『史記抄』（『抄物資料集成』・岡見正雄外編・清文堂・昭46年）、『四河入海』（『抄物資料集成』・岡見正雄外編・清文堂・昭46年）、『論語抄の国語学的研究』（坂詰力治編・武蔵野書院・昭59～62年）、『中華若木詩抄〔寛永版〕』（福島邦道編・笠間書院・昭58年）、『きのふはけふの物語研究及び総索引』（北原保雄編・笠間索引叢刊9・昭48年）、『近世文学総索引井原西鶴』（近世文学総索引編纂委員会編・教育社・平2年）、『近世文学総索引近松門左衛門』（近世文学総索引編纂委員会編・教育社・昭61年）、『作家用語索引森鷗外』（近代作家用語研究会教育技術研究所編・教育社・昭60年）、『作家用語索引夏目漱石』（近代作家用語研究会教育技術研究所編・教育社・昭61年）、『作家用語索引太宰治』（近代作家用語研究会教育技術研究所編・教育社・平元年）

これら以外には『日本古典文学大系（岩波書店）』を使用した。

（2）『講座国語史3語彙史』（阪倉篤義外編、大修館書店、昭46年）の「近代の語彙Ⅰ」の項（213ページ）に見られる。

（3）『音曲玉渕集巻二』（享保一二年刊・三浦庚妥著・東北大学付属図書館狩野文庫）の「開合之部」で謡曲百番にわたって長音の開合の実例を述べているが、九十六番「舟弁慶」で「功名」の「功」を合音「コウ」としている。

（4）佐藤喜代治、『日本の漢語』（角川書店、昭54年）、285ページ。

――東北大学大学院生――